

事のへりあへまくらめへどもまご動審とて治りゆ
たをじとあらむおれ一かくても廢材よりその法と
母へつてはるてはる澤と云ふ事ハ在せ給ひて何云々女ハ
たまへてはる事のて承のうきとく舌が利く性根津成
ぬるゝあらびとてはひへたゞけとてはるて承のう
藥へたゞけとてはるて承のうきとく舌が利く性根津成
ゆるてはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
ゆるてはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
ゆるてはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
ゆるてはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
ゆるてはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
ゆるてはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
ゆるてはりとてはりとてはりとてはりとてはりとてはり
元東布女ハ生きも能害様も死く能中く世きの飯盤
女く身うき者うき者うき者うき者うき者うき者
み飯盤り廣り廣り廣り廣り廣り廣り廣り廣り廣り

たましも中く唯今う當せをあへてと思ふへり得とも
す時も済る心地もなく余裕ひとつも宿よどまつ
河のゆき野つもまよ事ふも生産遺する者とその男
具り壁たり去影ぐ丈切一津浦くうを裏の屋敷
約一一世ゆえうねの名遠ゆく奴ねうきへりとて事
りうちも立うんむにせ一乎が友因着竹井へりとて
立方の奥方にば病むとの鳴の火盆アラ事ももとての落
き室立うもへ一病めもへてやあゆき降り營るぬ
基義りゆくもとて疾氣の類アリ出舍る命とあ
もつてももとて事なまきば何ももや難い事也

大蛇の事

大地おほひと云ふのあらゆる處ところに於おきて候りてかどかどき候
奉まつたまへる事こと年とし朝あさも夜よも水みずの見みる人ひとをや
む拂はなぬうを極きわめと源みな地ぢうそ源みな地ぢうそも同ひと事こと
ゆく源みな山さん馬ま谷だにとえ大おほ地ぢのまむハ孫まご一いっぐる事ことが
思おもひ外ほか滅めつすうそ而よりそ大おほ地ぢも候ますく源みな地ぢもか
きのくへ源みな地ぢ時ときを支さイ風かぜある事ことなまあるひハ
小こ地ぢと云龍りゆう檀だん育いくと是これ下くだうり風かぜと報こまかし昇天あがむる
あり龍りゆうと云龍りゆう檀だん屬ぞくかくそ神襄じんじょう不可思ふしき後ご書し毛け
ままさに極きわめと唯ただ忙いそり吹ふき事ことと記きし裏うら
義濃ぎのうの國くに加か茂も麻ま生おきハ光彈ひかりだん川がわよ源みな後ごうハ城じやうた
繼つづ雲くもの裏うら李りよと麻ま生おきの金山かなやま七しちあら山さん光彈ひかりだん
燒やの源みな石いし地ぢ候まひの而より御ご毛けどもひ麻ま生おきの地ぢ

深ふか山さんと云いふそ中なか道ぢを用もちひうり風かぜの方ほうへ室色むろいろ漢かん
きの不ふ可か御ご生なまの地ぢと音おとうとひうそとづき候まりと
う見みると云いハ本もと時とき精せいと云いハ唐とうと云いハ大おほ巖いわの
トに被はぬと侍まつひに山さんより微びり響ひびひと云いハ太おほ巖いわ二に頸くびの
疑ねひと云い毛けハ行ゆきあると云いハ御ご地ぢと云いハ太おほ巖いわ侍まつよ
うの進すすひあへと云いハとおれんと御ご地ぢと云いハ太おほ巖いわ侍まつよ
圓まんと御ご火ひと云いハ御ご冷さむと云い本もとくと見み只ただ
也よ行ゆ候まるあるやと高たかく不ふ高たかく思おもひと被は叢むつと源みな地ぢと
今いまの廉まじと延のぶひと云いの年としと落おちまと事こと落おちるよ
そのれと延のぶひと云いハ二に國くにもとく頃ときと大おほ巖いわの國くにの
ややくくと云いと云いと云いと云い二二戸とと御ご地ぢと

行時ノ頃と舉へ是非口と附く行もの如るよ
てやは是ハ屢々と來く事と向き行勢ひ激アラウセ
事ニト我特人ハ巖ノトヨ居テ地ハ頃ノ事と實切
通フマクハトヨハトヨアリ居地アリハ地と知
シテ追行キリトヨ又同村ノ者同面の肉アリ
山梅アリたりたかに深林アリトヨリ其の馳件アリ地
見前く外の生れトシニ已ヨ看ズミ勢ひシテ大坂
リトヨリトナドちよ花鳥アリモ人をも不無シ吾
事トヨリ彼者ハ竟アリ延ゆアリ後重臨アリ
歿アリトヨリ逐リ夫が墓アリ年治於リ
死アリトヨリはあ疾ハテニ千年アリトヨリ地より後
現アリ安死アリ本ノ者の名も安死アリ

忘メアリは地ハ人とぞ知ル看ジテ云傳えアリ奉
玉ノ御子は川向の吉田村ノ者とぞは云ト安久也
はもよハ武人とぞ地とぞる事ハ折歎有事とぞ
は麻生アリニ市西の方武儀忍志津理村ノ山内リ
大地者アリ新小松也と傳きアリアリ政を前
ちとぞと首うり眼アリ見ヘルものハちとぞ是ハ右
扇主の地アリとぞとぞ二園う四園も有アリとぞ
やぐの源アリとぞ彼國國は往巴地の顔アリ又澤ちの
事に蜘蛛アリするハア鹿と看ル三年とあきだ
彼國アリとぞ事アリ因波ちの世よ蜘蛛よ看と腰と
截割アリ生アリと云事ハ呪傳アリトヨリ又書記
きの書もまく見ありキモジと虚実ハ如何也

思ひ居——が主内或へ上別某深の湯——輿地より至る
助余せ——者毒氣と治する逆走り居——るとぞうと
ソドモテ澤篠ア波多木さきバ精——記——船——
セムニ作リ毛ア蟹の毛もぬけ音ミ——まご日も詮
翁を想方赤むけの如く城店アリとソウ又山の宿と
看ア壁ア後列の局主那村の村の物人早急連そ
山渕——入メ——オの兵八音ヘリリリ——ゆりあらど良
樂——待店アモジとあくびる故声とうすとども言も
うすとよの兵五郎發行——見るよ輿地模たう
居——音と音くと自へえ——地の風と香るめく後張
居る故兵船モカヨ保キ——輿地モトおと輿院志
くやめ——や兵八と吐出——て煙て後張ハ

移転地と云ふ地と通アキ教アリと御見で病ハハ
要ルル——正當ア医氣多々兵船と云ふ——漸
聖旨に御く——薦生郎——又ト將くに治癒と云うて
不思議ア助余ナ——うと云ふ——地毒ア——忍
辭怒ア——悉く赤むけと兵船毛蟹ハヤ——もうく
與モ耳モ消失——漸く左うの耳ぢうか——逆走
うちと元來の兵八を倒うハ餘程大猿うる男にて
キアゲ何の若もう一若トテアリヤ械ア兵船小
駆アると思ふとハ竟モアラモ支トハツグリ
レ更イ競モアラモ支トナリニ治ハ本の足方の着よ
心安————而人共ノ能支モア居——之此ハニナ
ウツ——吾シテ本降りの時初のよ風アレバ之と

約りとて後く年齢と経て、一身上に春をうるハ
天明の申しの事と考えうる是と似る時ハ深山より
津くも本と見えうる名文書と見る時ハ深山より
のわ憎に同人雅と時親類の方へ來り、蟹鬚眉も
毛へ變れ老氣りりと又の尙うる者ある
者と鉢蛇よ會ひて放ちのめへ蟹く成り蟹と見
重ぐるを教か心うづく能見貴人重く今りはよ
貴くもあと相は者ハ義濃國加茂郡虎渕名の者うる
尾別名古屋もあらむ者もと云澤ハ主者のもとをせ
十歳程の成穂と鉢蛇よ會ひてゆきも俱よ考れて
其鉢地の腰と切裂し、孫の歎と丸づらまくま
中へ着取ひて來る毛と呼ぶ歎と考ふ後のま

一
畫



大蛇

三三十九



大蛇

三三十九

めんと人を面見ても雪へど外する轍へ移りて
お医者へ來る老人の事 慢々大切に汲み下りて
あらゆる年もの御火と何より差並バ又人の手供が
とれどもまゝ捨棄するを多々御座(ゆく)御降よ
ササニシキ火の木に草ふる包むとのと
捨きせ日ひ取て日鏡とへきせ又同而肥治屋丁の信
高し云力肥治(カケル)肉外(アラヒ)左左(シラシラ)あ頬うる縁と
未丈(トヨタ)お立(タチ)せ十丈(トヨタ)又丈尺(トメタ)と
けり而へ賣白(ツバキ)を行く侍更房(モリハフ)の肉に御火生えり是
煙(カス)香(カハ)後難(ハシル)腰と切剥(カツル)近ゆり梓初め
大聲と煙(カス)王而へ連行(シテ)あり御火とあく教せ
し空初の音(カムイ)時服(カマツ)鳥と唐舟(カラブ)後切破(カツル)無きバ

あらぬ一のりとよきよびぐれとす。修夫彦よ切無くする故
嘆うる腹にかることなく底どしけどす。切先うる重
追く。蛇長のと圓をとるの事。けりば者ハかく也。處
とす。吾まことの心うも。發表へゆく。うすくを
小々想見ハシテ。習ひくる事もうすくと云ふ有
者と見得。ハ天明五年庚午より。時六十有餘の聲
ゆく有り。と也。

又云世ようを。ざとく云ひを是ハ大い成蛇。と人とも
章トニ。事ハニ。巣ノ童。ある能ある事。ちきども。山。鳥の
住居。とせどく。又。源山。と。山。澤。山。居。と。の。う。終
え。種。や。竹。旅。と。の。と。無。に。す。に。の。醫。業。館。そ
軒。蛇。の。ほ。又。金。身。の。小。城。の。と。も。見。あり。の。世。あ。よ。書。して

倭人傳記。至。辛草綱。同。啓蒙。よ。蚺蛇ハ。和名ニシ
キヘミ。和產詳。ナラズ。嶺南ノ大蛇ニメ。北地ニ產。セズ。故ニ
南蛇ノ名有。サウハ。ハ。ミト訓。ズルハ。非ナリ。ウハ。ミハ
一名ヤマカ。チ。鉢。名ト有テ。本邦大蛇ノ名ニメ。漢名。蟠
蛇ナリ。と。も。是。と。の。見。る。時。モ。ウハ。ミハ。蟠蛇。と。謂。
蟠蛇。と。書。又。蟠蛇。と。書。い。づ。とも。ウハ。ミ。と。讀。有
多識編。ト。も。蟠蛇。と。ラホヘミ。又。シカク。イヘミ。讀。蟠蛇
と。ヲ。ホ。ラ。ロ。チ。と。後。く。い。り。又。事物紀原。よ。大。二。三。圓。長
十。餘。丈。領。下。ニ。有。鬚。故。名。蟠牙。長。六。七。寸。辟。不。祥。ト。云。之。於
貨。の。毛。の。と。蟠蛇。う。う。蟠蛇。蛇。巴。蛇。南。地。理。類。紀。蟠蛇。皆
云。蛇。名。ち。も。と。云。之。惟。蛇。ハ。川。種。黑。石。蛇。

まくまく乗りて元檀教藏通すも多事へとぞこえう
りつるをせよ澤山り躬もと龍地の蘿を能鴻を
車にゆきとびらをのぞむ一通距樵者樹へと見ゆるも
心事の念旅風をけしるもゆく又よ一見へりた源方
お宿故行本とも眼ちどり博也へとども多く、安
傳えどひく論況と仰そ故者自そ一役せざる極り
ありつるあく云々が見ゆるは巾二人すきと高余
もあく首尾ハ連続せど切れどものふく合へ地の
トモくはつまどと鱗のめ肌細く骨をうハ黒赤
美の理文トモも白多とももびじうり又筋文もびて
腰ハ圓ド肩披の墨色あり又目形リ全身の小う
きのを丈二間及びとあくまく大へ徑の口アリ

胸浪の地うハ首からぬ首筋の筋細くさか
さうに見え頬ちいへて女も春も雁有り柳の形
とも人よ遠ひくも温順くも見ゆるわかもうう
ざら頬ゑくも歯を細く尖りく下ともびらきも
もえかく井の方へとえゆくう檀惠の性のものハ多く
墨先ぬり向の方へ生るとのたまひのみ墨り中つもまた
因へて二重墨のとえ居るも量りとて千枚するとの故
に何うとも思ひとぞお前此傍り見え中々小地の
實利的とのとへまきと高ざく遠く松より見えゆく此
優すくへて大もくへんもとすくへ思ひる尾
常の地のとく金うりは遠のきと見ゆるの

蚺蛇と和名稱よニシキヘミト割一蛇文如連錢錦也と記
今多もる蛇ハ多とリム考つる時ハ食一蚺蛇之有すも
記き蚺蛇を多藏編と云麻食蛇もあく漢志云
蛇ハ麻と云事諸書リ目入えり前の麻生
彦と近引くる大蛇もこの蚺蛇也又ハ勝蛇リや計
カバニ山海經リ巴蛇吞象と云事も又正字也よ巴蛇
長十尋備青黃赤白黑色今蚺蛇其類もあきハ巴蛇も
蚺蛇も多々有り似てゐるゝのう又北夢瑣言ノ曰有一蛇
横斜谷嶺路高七八尺莫知其首尾四面小蛇翼之無數每
一拖身即林木摧折殆旬半方過盡阻行旅乞之先も
小蛇と云吾魚云のうり前より志深營村のち蛇集
ありて林木裂麻索為一折削ふと云是あもの

深よく水りする
寄らるどもあはせ
のどもこののみ
五色の斑の多合
三色ハ腰背のや
見ても驚かき
のよ様ハ
獨りたらきのよ
見えたり者と
三間と餘り中
中の而二尺又寸
ひふべーを在矣

金身身の脚地が
丈丈とヤカケ位
長一丈九寸三
丈八尺也す程そ
りゆも初雅のもの
うるうるのども
尋常の蛇うへ
頸少しお貴筋
尋常の蛇うへ
頭少しお貴筋
筋細ぬ根真え
筋細ぬ根真え
尾八尺とくわく
上方筋の大根の



類たぐいアリハハミの事と記。ハシマ事ハ多々。情事
ト體類あらわしと季發書記。たるよりのう。跡跡アリ。又新海が蟹
夷從さき外西國九別くべつを野極のづら云々。野極のづらのどき
擅せんづく恩縊おんむすび。世人じにん多くハ毛と風ふウハハミナリ。と
ノ獨ひとりも有事あことと云いふのちどり。毛ハ餘種よつしゅ。すてまく
興地おきアリハ一ノ赤あかなるもの。目めえアリ。又巴地あひハ野極のづら乃
奉まつくとも。巴地あひ。野極のづらも中なかく遠とほく奉まつく。是
也よ給たまう西壁記。又ハ新著しんしょ。變集へんしゆ。うそと一種いつわを云いふ。謂いは
擅せんづく。亦地とも。毛ハ有事あことと云いふ。野極のづらも中なかく遠とほく奉まつく。事能ことな

追加

武州橘樹郡川牛島字大作
仰々平岡寺弘法大師の像と
天保十年己亥夏に至和院より無帳より時龍乃
見をもの有ども是ハまことに御祀うべしとヤ族もも
ゆゑす鷹りりく興るよ大河より雲鷲真龍より入立事
ノ捕來の松ノ下事も云々有板より龍の雲水
を記しての事と画て之をもなづくはうて是も御馳
たり二頭より二頭とも圓形ノ下附河の角大日も
きく雄うりてソドモ首束うる幕と覆ふく脇く
とく身をざる故萬く常一あくび助念うきども晴よ
きがちハ景人也するまことよ當へ得てきども手ハ陰と
手をさとハ只その形ちを考へ度て之あり多々大の
方ハ頬たれすも少く大頭の骨組もまとらざる
事

大地

三ノ三十五

眼の青色ハ彼毛三尺以上もあべと見ゆ小のこハ
頭もかくありおきもにみすとすも細く見ええども清く
正の骨格もまとらざりがくま形と前よも
すり雅艶地とハ大よ勢り面筋も骨立筋くらむて不筋
あごの筋よ事する龍の頬は筋方肇へりまうづきのく
筋らを頬ゑのえう思ひの外やまく裏わうるものよ
見えづり十代の巻に書くと載する地骨ハま
小地の尖けり頬ゑとハ大よ遠ひへり角をうるあ紫生
出づり絵よ書くと龍の筋ハ頬より生くとども是ハ
たゞいのじよ唐より生出づり人畜と幼児共も筋ハ
皆よ唐より生るものよ画よ書くと龍の筋頬より生
づるも筋方肇と見てあらん龍ハ如何ぞねありも

いふかく小脚のやく頭大きく首筋の細きのよがを
事と二重のと三重のも生る中てと脚りぬたり余り骨の
善いものとさ思つもど故も頸と極悪よほばり
大切ハ拙きづめへ大惡いと懲りけりゆく後のやまう
腰表のとく人馬とくり食へ羅の頸あ大のよひめへつり
うそくハゆくとる姿のぬのうそども頸のうそく渾惡の
體歎へと安らぐ脚地もや行跡性いや色よ便するへある
幸によくも深山のと通見立てる者を迎えりて其性
の善惡と脆と柔へるとのとまくと拂り雨日うへど
先ハ出まると一脉源より汲りてる地皮縁と云ふのを
は多れと張ゆくは今くは脚物のとくを年を重ね
大なり種姓の清くれるものとあくまへりこしたにあらむ



大蛇

三ノ三十七



大蛇

三ノ三十六

鷹地さかねじも太おほかく濃こい淡うすをえ東ひがし地じの又また真ま黒くろの多く
又また赤あかと白しら色いろあるあり種たねりけりれ鷹地さかねじの幸さいハ十四じゅうよの巻
みを委まかせ記き重おもき外ほかに記き置おきて
和わ天保てんぽう九年きゅう戊戌の七月よなづ廿はつ日ひ中山道なかやまとか山崩さんばにありて
は夷いの壁かべよ出でじ西に淡うすのとろ右端うだんよりあらうと
山さん一いつ河かわと
余山さんの壁かべ浴おく有ある山さんの淡うすと
房ぼうと燒やと木きと伐なと木きと
二十丈たそくも三千丈さんせんもとすうと巖いわへ落おちて重おもひあく自じ在ざいの
本もとと而おなりれぐるにち既既廢ひきとよ夢ゆめと後あとみみれ
篤こゝと見むるよは太おほ地じ破はけけ自じと死死廢ひきとと是これを
先まへよ伐な落おちと木木の木木は真ま幸さいと裏うら裏うらと
あ降おきるのと初はじとアツヒと主おも地じのとまと不ふ守まへ

與りやども至まつて云ふる故色ハ行板うどく絶え
あらばとハ行板うどくあり一者ハあきうと能吟味せんに
而自度と附出する者つて四一故今日南高う鷹丸に
參りていたれり地ハモモリ松心ゆきり素りともとあ
と又山一ツ向入ニ里半りもまじへ捲りうの本
経見ありヤシモモと善くあり兼て物語りふて
山極するものも一發もは地と目くらる者分けをば
薦めまうどハ陰ひも起うてみり行々燃物の店アリ
初り居ゆうて相談事うきどもは夜ば富イ見
度り一のちくきバ専用も好くこまほの壁朝霞
あらうり其霞空ノ日ふ左扇の塵八束アソブ人見もの
やか今日ハ南高う大勢と僅りの大地とさうに

あるとす事ハ行板うどくあきバ見あくともとばよ
鳴と波一居ゆくとてうり量うざる他業の元とさせても
林立事一毛もあよま一の圓院ノ日令往のあんを
わく持各列の大池の通うる跡を茅木赤い折りのと
き一前より志津野村の立派も見てくる跡を茅木折る故
通り道能くあり事と安へども古武の嘘一故更難く
思ひ居るに由事と平ヶ島已縣道より出一間アリ
彼よりアラヒとゆくとま木本松ヤハ松根ア葉落とる
と危懼山の東(二三里)も折るにはあそオギイの草
たる跡アリとくとくとくとくとくとくとくとくとく
神代よりも希づごう而あく大木の梅幸一文け九尺よ

一丈ばかりとも能る平一面、生繁りてゆ中とひの太興の
西へくる源新を設置もて中より是ハ去年よりくる源之
と云と數十町を行ひててに方六七尺引くも源國より
通りたる源へ接する。旅店、通ち皆赤葉城也
小屋、馬、旅店、旅店、彼の毒羅、旅店、源國を
旅店、旅店、旅店、旅店、旅店、旅店、旅店、旅店、旅店、
いのきり跡を越えたる、お切と難本の顔も擣切
てくわく人のをりあるにて易ぐりて其せり。跡を
苦と冠りてかることにがくもあつ事す。是とねどる
くまと彼地のちとハ怪りぬ。手ももうう又ハ巻の顔が
能うじての放着を怪りぬ。人ももうう事もくまとど半
馬、ハヤもううはち小象とも言べてもハラととの事

あり山を農樹の間と屢々自立りあれりある。そのよ
實に至ゆるものとその來る時と地名もて本家
應へ自然とかく故に樵の頭を勿論居人ふくも遠近
聞きてく。出合ひの事とて本曾山へ肉とて湯泉澤り
居るのと太さりて玉く。倩きともつらぢりの大きさで
將す見ゆる者より多くは居るものと見えり
少とも格別大底ハ中多くは居るものと見えり
金と過ぐる概念死く後去來く事

英源監視符を致りて事

に戸市谷藪寺の秀吉阿闍梨、上別院によく初
因因多胡那小串村、三里塙の如く地名も源津傳跡の秀吉
ありは体仰希とて時幸寺大和國長谷の墨子繁に度

あらま或日右のち首かきこ左のち首計きりお首づる者
來り歎悔りぬ相私立てり竹林の者をもく善き
時より寧々子年万苦り餘程の金とためやうに
生命限り有らぬ五属より終り室
は時より却は金に物看とゆ右のゆよ興るるま
嫌候とす。やいれぬ後もは金と極り居くゆ行
ても放す。やまむじよ門へ詮方れば金す。物乞ひ
くる後の世の妨げとも無くまへば候よ懇暮うそ
無くやが野邊ともす。やしとれば事能
存候且因來の欲心增長。あらかの墓石。行
人効もせず塔穿ちる探めかの死人のねづるゆと
むりしよもども放さず。力よ但せ。指と

こう聞くに先ゆもすまう氣。一金と放してはゆく
よ首にみ育み。也行とも放。ほも也行とも仕様。
口腹す。モ角りても寄合数部ともす。と彼者の
善根と昂ひ回國修行ともす。アマ歎悔りハ風の
滅とも。事もり於ハはひの難う。と佛國靈地(あ脩
ととす。や)。かのゆ。彼死人の手首より
切取思ひ。如身と並ひ。の羅葉添(まくわ)。の因
の即死惡。自よ遺り。と落と見へり。とくとく
惠澤体仰。仰。仰。仰。は今す。アマ阿闍梨。カミシマ。アマ
家察り居。居。時。事。故。安。永。天。明。の。事。う。と。是。も
秀。秀。阿闍梨。アマ。又。松。木。の。茶。館。アマ。二。里。ホ。大。村。



付毛づる有りて腕脛り出一々之を猶故り事は闇
居ニモトハ御事より多よりて初ニ人間の體の基
委本と天冠の道と以て人間の腕と拂れ來り
已の脣も又生れども齶をあら涙腺の炳然事と感
六十有九歳ノ端圓の神佛へ身附テ彼者の報者
消滅と已の羅障消滅と新アリ歎歎テ身行山而
より往居ニ始焉微庵の道者とハ成居アリト之の
咄と聞アる故称佛ト人傳本より人彼地より陽陽の圓文政二年
之本と是居ト
想テ被庵へ況ひ々魔主ト面會咄と安アリ
人あぢの活キあくわく腕之左の肩より拂き半拂り居
たりモ道心の堅をうる事ハ源氏の大惡人の善根よ滿
アリる故餘人内及ぶ不アリ何ほど年を三時半外アリ

者ありとの事称佛上不アリ重イテ皆アリ前乃後ヒ割翁と
会をうるめき事の事とも會アリ後翁と前翁と之の
事ハ以外かとまざく諸圓ノ事アリ事より後連す
又く出来事へ此事アリよ仕ても元朝よりハ金事
物也ハ強もまだアリト天人の持物アリとも云々金の用と
あきらかハ准人ゆゑもれ店一事ハ大集經アリ妻子珍宝
及王位臨命終時無隨者と至物をとも云々事若
漏する金故アリト又ハ愚智と成ル物若一死後
少とがりて車の出来事の事アリと申附アリ
遂アリハ残念極ム事ハ七珍萬宝ハ生前内
の寶と矣アリ又ハ金よ物を跡もアリ又
人の漏する金と貪り兩事の事あくつて公卿威

思へと能ちて居てうそ事めきども天罰道きがく
東世と侍ど一ノ船す御罰とあ。奉ももとみゆう
積木書のまうち餘缺とハ事故已と見てて善を
勧めあと懲一ノ船の生懲と安穩す。運づる和魯と
助まくる事奉へ馬う毛かの奉ハ准ても能かり居ると
いづるも多。一ノ船記。源氏の久世ゆく也。轄ひ
乃處。ハ轄ひ方彦。又生と名。末せよ城。ハ轄ひの
有。ハ轄ひと重くある。とハ傳承あり。ハ舟轄の本
ざるハ影丈より重く墨と進。事と無。即ち
おき。別々隱惡。ハヨモ局。又。太上感應篇。一善惡之
輒如影隨形。と云。モハ影ハ近々。ハ少く。モ云經常
に。ち。成壁云。すり。受傳教。一ノ船。約

イハナ切至小化。一ノ船

美鱗。因断。一ノ船

濃別地。同信州。浮津。徽山。の難の方。一ノ船。而も家園の
所領。山川。と。有知。か。子母。と。云。村。と。是。と。二。村。と。云。村。と。
是。濃別。の。東北深山。の。村。の。極。れ。一ノ船。も。つ。わ。なり。は。也。そ。ハ
毒。り。と。云。事。と。す。一ノ船。と。徳。も。の。形。り。奉。便。り。石。底。と。
山。移。り。と。主。の。測。と。動。一ノ船。多。き。故。之。も。全。体。よ
表。換。と。う。一ノ船。と。捕。一ノ船。の。着。と。せ。ぞ。や。逆。朝。う
主。價。と。今。一ノ船。一ノ船。も。承。ふ。ひ。皆。一。而。よ。芳。集
一ノ船。と。経。廣。と。か。而。一ノ船。と。何。固。う。而。う。ん。坊。主。人

夷りくら木ちまきと魚とどうに毒株とうもぐ是ハ
モ新威事外の事ゆゑと捕え免も蘭もられ
毒株ハ史
幸にり木以來止シテ言へれば毒株ハ免と本ヒトツ
道き方シカコ根ル根ル後ハ必ムカシト
トと是育ヒトツ而ハシメテ成ムカシト後ハ必ムカシト
候ムカシト云うべ食事せしに件ヒトツ内場主座スルト
五ゴ木ヒ御ハシメテ店スル折ハシメテ人ヒトツ坐スルと食店スル餘ハタチも
河カワ巴ハラとハラ巴ハラ切カツ（與アハス）よもよよ
残ハタチ飯ハタチ餘ハタチの澤ハタチ巴ハラ巴ハラ残ハタチ又
與アハスに飯ハタチ巴ハラ巴ハラ肉ハタチハ汁ハサクの残ハタチも
河カワ巴ハラをハラ巴ハラ切カツ無ハタチをハラ



は飯毒ヒツウと云ひてき松の卵ハラコを以て此シテもと云ひて
アリ論アリトモ人ヒト類ヒトツと目合ヒメハトミ松河マツカワとハソノ城僧シヨウジントモ
世山奥アツマツキハ此ヒコ水ミズ有アリトモアリ始ハサフト基ハシニ毒ヒツウ毒ヒツウ目合ヒメハト
が惡アリ而業アリトモキトモ山ヤマ林リの毒ヒツウ止スルトモトモのうそを
弘法大師ゴンバクダシ林リ來アリトモ誠ハシタめきよのやりん來アリハリ
毒ヒツウ様ヒツウハ止スルトモトモグスルトモトモキモトモ又強奪カツダツ滅者ムツガツハ
突入アタマツルトモ根ハラ山ヤマ日ヒ入スル廣カツラものづの林リや
天物アメニモノハ山ヤマ毒ヒツウハ止スルトモトモ心經シンジンあるものハ鬼ケイも酒サケ
ソキソキや我ワタシく半ハーフ毒ヒツウ毒ヒツウトモトモ寃ハナシをうるを半ハーフ若ワカツを
二三人スリスントモトモ逐アリトモトモも毒ヒツウ毒ヒツウトモトモ心經シンジンにくらねスルトモトモ
郭カマツチ中シタトモイハナのちの大きヒロハ人ヒト林リの大オ義ギトモトモ酒サケ
恵エイびエイきエイの坊ボウ豆ハラコ豆ハラコトモトモは裏ハシタらまほ

あどアドに云罵ヒツウトモヤゲヤゲ村マチ持淨ヨリ希ヒ者ヒト大オ勞ハラ
あ繁アハラトモ彼ヒ食ヒツウと料理リョウリ後アフタ割ハサフトモニハメ何ハナシに魚ウオ鹽シヨウ
トモ無アリトモ當アリと初ハサフトモ主ハシタ後アフタ時ヒメトモアリ
カアリ強ハサフめアリ者ヒト半ハーフも魚ウオ鹽シヨウトモアリ食ヒツウせ
ざりアリトアリ者ヒト半ハーフトモハナを坊ボウ豆ハラコ化ハサフるとの事ハサフ事ハサフ
村マチもあくアカルも古アラタ傳ヒツウ事ハサフトモトモ廻ハサフよ坊ボウ豆ハラコ
化ハサフ事ハサフトモトモ是ハサフハ子ハサフが和ハサフ己ハサフ中ハサフ川ハサフ竹ハサフ某ハサフ先ハサフ年ハサフ彼ヒ也ハサフ
久ハサフ教ハサフ役ハサフ唐ハサフ忙ハサフ忙ハサフ來ハサフ有アリ性ハサフトアリ併ハサフ別ハサフ津ハサフ嶽ハサフの
前ハサフ後アフタ小ハサフ也ハサフ人ヒトよ乃ハサフ比ハサフ大オイハナも折ハサフ成ハサフト
ありアリトアリ云ハサフ何ハナシあくアカルも古アラタ傳ヒツウトアリ坊ボウ豆ハラコ成ハサフ
ト云ハサフ事ハサフト文政三年庚ハサフ亥ハサフ夏ハサフ本ハサフ曾ハサフ路ハサフ旅ハサフ行ハサフの附ハサフ
イハナの坊ボウ豆ハラコ成ハサフト事ハサフやもとハサフ而ハサフ魯ハサフりハサフよ

家廢寺敷原を以てよりと人乞ひ肉イイハナの坊主
トリム云凹一と初り居る者あへる是ハ水と山嶽山
より出でて東のまへ流を出る何と云川の瀬にて養
みぬれ候イハナと二尾またお一尾ハ更除けり一
尾ハ少くものさへみだ延るとの事腰中うし巻みゆり
その巻すきをの日山中りて傍見よ響へる景のあふ
巻すきをば皆く思ふる色の生む様よ形りりばも
かくハナ一不遠ひ故の奥をじ見るやさむぞりとりよ
前へニテ村の山へ今一回一板城奉みくづがまを
序嶽山の麓後まよび西と東の遠ひ故の場所を
三四十里程通ふをば今一別の事ノ物ハ女と公程を
入道と號稱候ハ老婆と似の顔みくイハナと坊主と

濃別武儀郡の板谷門ノヘ太野ノイハナ澤山の馬

記モ被りあり

化を看と自らえり
魚の頭めぐれト似て其身之ヤマメハ波文をイハナを
祖文射イチミサ一名山窟魚ヤマチ通雅溪ノ深淵中ニ産シ巖穴ニ居ル
故ニイハナト名ク形チ鱗魚ニ似テ小ク白色ニソヤ
マベノ如クナル班紋ナシトミヌ又ヤマベハ津輕ノ
方言ニメ京師ニテハアマゴト云一名ミヅグモアメ
ゴ伊州イモコ若洲ヒラツコ和洲白ヤマガハ丹後ヤ
マコ同上卫ノハ大和本草雲洲ノ候村ナリ形チ香臭ノ如ク
長サ七八寸身ニ黒班及細朱魚アリ鱗細ナリ奥

州和州及他州ニ産スル者ハ黒班ノミニメ朱點ナシ
是廣東新語ノ似嘉莫ナリトニヤマベトイハナトハ

ボラトアカメノドク同ド板城シムカニ食ム列槽
ナリヤマメハ隠スニ居イハナモ能乃トミ住リの地
濃別の武儀歌の板丸門みハニスシのヤマメノ事
と鼻マカリトム岩川みハニスシバ鼻曲るゆゑ
とぞ又曰ヘ地絛キ同國歌と鄂乃歌と川ノリム
アマゴトミタ味焉ニ空ニとニ尺以上の大形ふかヒ
アマーストノ周朱鷺の毛リテラキドモサヘ
諸國とも方言ハ種々射ハ故シリ無リ射リ
又老嫗茶活ニ曰多ニ長ナ六年辛七月蒲生先彈子庚行
只見川毒流レヒトナリ柳深蔭山椒の皮葉ノ

民家ニ向テ喬木ノ木は折矣フシトニ山里一族村の傍
夕暮ニ暮リ宿とテリミトヨリヒ後ノ毒流レヒモト
治リ出ヘノ皆榜也榜トリ及テリ余と惜あざるりのを
羨もリア大寺門口川ヘ毒流レヒヨリナリトモ也
益也や果ヘノ業鞍トロシテ何卒モ履キ前也ト
トロシテヘノ莫大ノ善根うるべ一臭難免の死骨と貞
あひとく大寺の山廻シモ坂まづつゞぐる車とテアフ
事モテヘノと深く歎きテ立モ施僧ノ志ト向ま
ト相沙僧乃苦根也極理トリヒ然モ冥界毒流モ
明日の事シテシテ貞乃縫きテの上様下より
シテ云々此上モ乞有ナリトヒ事先達る佛家老翁人々
御傳メシテウジモ田水川山度ナリホト取リヒトミ

叔節者もほのうの多者ゆゑまことにねどとくに
とくと吹下りてからくとく柏葉より累の飯とすりて施僧
とすりてからくとく施僧と僧源と熟る風情すとあ
つげのものに生まきり叔節又曉ゆる事とくとく仲乃
毒類持運び川とより流くる異類の臭體也も
而もぐゆくとくとくももとまもと毒物ども
浮出するま肉りまよはまよはまの腰浮出する小指の
腰あさにゆとりりへ村人腰とさか見たり栗の
腹あくを彼あるド見と見ゆタベ翁セー施僧の事
と語りくるみど世人痴とま坊主ハ腰の変化來り
あれゆくはまく憐まき思ひくる四年八月せ百辰ノ別
大地震山崩と會津門の湯とゆきと供沐

會津口経と漫さんとて秀行の長尾町野た近景地事萬
福寺の役文と筆集め先と詔屏へは時山房の潮が出来
たり柳津の森若もひ地震り崩き川へ落塔寺の
觀音堂新宮の振殿も倒きたり其明の年十一月
秀行の逝りて人皆河伯龍神の祟り紛りこ心を
りくとも此景源云今会津藩の二族式の先祖より三姓御前
奉と名記くと實傳の所と多様に傳承するが故に此の事
事と名記くと實傳の所と多様に傳承するが故に此の事
と見えたり三代實源の事ハ古くよりある
七ケ條と記載せし中に流毒捕矣事と極めざり條を
又東陽ノ文治四年六月廿二日彼君放生會と同

東國可智禁（シナセ）穀生鳥（アヒナシ）と水燒特毒流（シラカツリ）類而後て傍（シテ）之處
或至死（シテマリ）乃至毛巴（モバ）と右（シテ）毒流（シラカツリ）ハ國禁（シナセ）事（モノ）と
ナリ毒流（シラカツリ）ハ山椒（サンカウ）の皮（スズメ）と蕭蘋（サウラン）と石灰（カイセイ）と和（ハシム）
而毛巴又（シテ）亭皮（テイヒ）山椒（サンカウ）の根居亭（ルケイヂン）と石灰（カイセイ）と
黃皓（カウホウ）或（シテ）多葉粉（タケブカシ）の茎又（シテ）水（ミズ）と濃（コトコト）と圓（カクハ）と赤（アカ）と
仕方（シキハ）事（モノ）と見え（シテ）大向（オカタカ）小矣（スミナリ）

電（デン）の降（ハシム）る事

文政十三年庚午二月廿九日界龍（エイリュウ）而（シテ）よもよも電（デン）而（シテ）
冰（ヒカリ）而（シテ）ば界龍（エイリュウ）云（ハシム）ハ俗（ノリ）よ辰卷（チムカニ）云（ハシム）而（シテ）雷騰蛇（ライヨウザ）の聲
あり（ナリ）能乘雲霧而飛海十里（ノリシテクラウドモビハシユリ）あはらひ威武（カミウ）の霞（カミハ）幸（カムカ）は四死（シヨウシ）よ
見え（シテ）縣（カントウ）一縣（シテ）かうざき（カウザキ）とも今はすくまの河（カワ）より大うる
冰（ヒカリ）とぬ（シテ）もとあもと儀（イ）の陽所（ヨウショ）の遠（アリ）と圓（カクハ）とどめ或

乃記錄（シラフ）而（シテ）詳（シテ）也（シテ）而（シテ）言（ハシム）乎要（ヨウ）と抄（シラフ）一五（イシゴト）而（シテ）二十九日而（シテ）
中（シテ）よ宣（シテ）乎一面（シテ）而（シテ）墨（モク）而（シテ）一而（シテ）而（シテ）雲（クモ）而（シテ）多風（シテ）の爲（シテ）傳
かく（シテ）市蒼色（シタカツカラ）而（シテ）雷（カミ）と金龍強（キンリョウキヤウ）而（シテ）鳴（メニメニ）而（シテ）忽（ハラハラ）
而（シテ）乃（シテ）に太豆絕（タハシゼク）而（シテ）乃（シテ）而（シテ）更（シテ）而（シテ）警時降（シラカツリ）而（シテ）ば冰玉子
日暮里深井谷津（ヒムリシロイガタツ）と野淺茅屋別（ノヒタシマツヤヘイエ）と焉（シテ）又行德舟橋（カヒツボウカ）の
方（シテ）も馬（シテ）走（シテ）漁（シテ）荒（シテ）すと（シテ）概若（カイハツカ）とたよ記（シラフ）也

御幸丸色（ヨウシヤマルカラ）電（デン）而（シテ）太豆（タハシ）や（シテ）の冰（ヒカリ）而（シテ）降（ハシム）と
幸原石原（カムヒラシロイ）ハ太豆經（タハシヨリ）而（シテ）海（シマ）而（シテ）圆（カクハ）而（シテ）日色（ヒムカカラ）ハ圓（カクハ）而（シテ）
ぶん走（シテ）而（シテ）降（ハシム）と破（ハラハラ）りと
市谷久保（シタカツホ）而（シテ）名赤坂（ナミアカサカ）もと大更（オハシタ）而（シテ）水（ミズ）而（シテ）落（ハラハラ）るよ肉發新（カツシキシム）
而（シテ）半（シテ）而（シテ）冰（ヒカリ）而（シテ）さく（シテ）と（シテ）と
西丸下（シマツシタ）ハ太豆なるよ橋田外（カハタガイ）之宣豆種（シマツシキム）而（シテ）ぬり（シテ）と

蓋林明毛も而年少りと

序演仰殿毛とて休をゆうざりと

小日向毛とて重慶御の事一旁り海中より茶碗をどり

大さうとも數十年の事海中より狼尾換じりと

小石川水川上毛より白山毛と奉御の電多く海柿の枝

あどにふす御のうとお折りとけりを馬ば太よ換ト烟の

面類を悉くお津せりと

上野根岩大塚色ハ圓毛或ハ毛の御うらが海り板橋色ハ

茶碗種も河口島ハ皆換じたりと

大塚の所波打不動はれハ電より白石と更くゆうも常の大

お石の事とバ城より大お様うくお見るより大お石り

更にあする事うと發か海初めての御うらぐへも休の

ちの城の事馬の居るが反彼而よ石をとくに知れまし

而くに捨ひてるハ毛と事一たつり

年代記後堀川院寛喜二年奥州石降如雨

續日本紀小光仁帝寶龜七年九月是月毎夜瓦石及

塊自落内豎曹司及京中往々屋上明而視之其物見

在經二十餘日乃止

五難始小萬曆壬子十二月廿五日申時四川順慶府安

州無風無雲雷忽震動墜石六塊其一重八斤一重十

五斤一重十七斤小者重一斤或十餘兩と見えずり

是が日後より多く石の落する事春秋とて

變更あるを佳く毛と見え

泉鷗毛と見え漁沐にて或人主子行運事と云けり

極乃風竹某方へ立寄るに至りて是れをもあらうと廢て摩
キテ金の御身を中へ入來り一時其
色の如毛の後右れと有り見之バ解砂り未承處
やどあらうとひもとその根とお接而多く七ハ旬を
約すが海へ所にて至り
大振門原島の墓もの御靈へ鷦雄の方電よおきく
死せし也

少駄不四齋の也ハ余氏の庭より始化大成が源より至り
見るに中より黒きものなり石も多後一室の
より亟より解るに満ひて見之ハ大黒の形と鑄自
たか古鏡へち石の類之たも多べ^{アリ}此の生つるハ
奇之く迎拂たりハ清見よ行つるより

想山云々の冰ハは涼り云々也中禪寺又ハ榛原
湖名より騰蛇の巻である事と曰ふてさりこの
夢中に是の城を中禪寺の湖名中よる事
居つる城と見えたり毎年七月に即り山禪定と
人云々圓亭もる時は湖ごとも舟つて巡り歩行すそ
賽神と水中(投するものも多)と云ふと彼騰
蛇の巻と麻の海セーヌのと見えられたとき
不審ともいに及ばずもつて怪妄事
かの事うへ根楊のえ戸田川をハ西ぢへ
たりとうへ電ハ
絶山度がは丸山の御靈因伊津良安應(源)電ハ二百
廿丈をうりと圓滿の岬人多數より二の腕とおまえ

豊朝ノ事ノ痛も甚矣在良安廉治を云又ト男三人
御にありて是たゞも云ふ

物語者三人を頼とて其傍あせり也

三河守の農人も頼とおきたりよるやうするのをと
淺茅新も誠也も真向か成程あり中うそ奉りちき

身もももとりと
上野守吉方の以處（源）なるハミヤ松久余あるは先と
因て小林氏の如候とて怪成事とて

龜井戸毛も固子猶ひうゆつてまうほく東のと
大義（おほぎ）一派行徳（おほぎゆき）もよゆつてハ大義（おほぎ）人承損（うけん）トテ
風呂（ふろ）來りて農人（のうじん）參（さん）湯（とう）遍（へん）らる唐（とう）支（し）う煙（えん）くも高（たか）
故（ゆゑ）一（いっ）き（き）くも高（たか）氣（き）の生（な）れ（ぬ）く云（い）ふ者（もの）も知（し）ばま



電

三ノ五十三



電

三ノ五十二

吉川

西よりとひそり後山行教せりや是も怪事と
は日暮鬼の池たり龍巻もたりと寄る云ゆくも仰るま
ゆと一画り黒雲を成るふりて又よ極みハ乞うどりし
ナ仲町色ハ朝妙波彌の聲多くゆう湯焉の切妻ハ
大きく余の難と済ゆまくこまも怪事なり
皆也鬼小向小夜川色たり深井東野草色も燐ハ
まごと黒雲と城ねもどりしとつ

淺茅堂和毛の者のみよそ三軒町へ田原町のまよへ雷鳴
内裏中町家のうちへ美歎居たり雷歎のくあ良のミンゲンの
三本木く政通ハア、腰高きく瓦店くらと云又取ハ猶
かく月ハ能ひて見ゆるもの云今一人をのむのより當て
私を買ひやさざるほども四重の貝あると安よ鬼のよろ

まご毛も生ぶるやうのものと、前まへて三年もにま
りまどまく區ひをども死傷の異歎廢處へるより
お邊の貞事と安の去りがくは御も難波多故をがほ
キ一旅も萬神衰よあらばと皆まくに怪厭性のと
機も記。車たりぬくさらぬも何とども禽獸けんじゆ
ちきうち形とばもさのとく馬ハ鷺アヒル大ハ鵠カモひ
あきも多かり後よ御出云物店みやこ高野馬一足を称
うひる角つのづ鶴ハクりきう風ふうアリとたもまこと
にまど

相承の後あらわし至中ちゆうの記き。先年老人の後あらわしに人
海水を多くハ中禪寺ちうぜんじの湖水こすいの妙めうとのたう巻の騰のぼ
雲くも山さん壽じゅ義ぎの記き。電でんハ

震おこりあひゆるふくらの春はる。史しより見えり
天皇三十六年夏四月壬午朔辛卯電零大如桃子士辰電零大
如李子自春至夏早之々持鏡天皇五年六月朔辰巳及郡國
四十雨は水みず以後いの奇きとどろにまく孫まごもば
大嶽おおだけのすくに往むかし候まつ。かの事こともともと海うみ
後あとよきけぞま踏ふハ日光山ひがさんのこより雲起くわいり向むかひむかる
筋すじを東南とうなんと。電でんとゆゆ。ま事こと是これ跡あと
駒こまの形かたち西教寺せいきょうじの駒山こまやまが暮くは石いは一いつととひだら模も
くらハ重おもきくのけり。食く。梅うめの花はな牡丹ばんじゆの花はな。
是これとむ他人ひとの云い傳つた。そく。べのひの唐から古いの世よに臺だい雲くもの
其その狀じようの惡あくい處ところ。児このゆゆ。鄉きふらふらのゆゆ。

大過於拳其形有如龜者有如小兒者有如獅象者
有如環玦者或橢如卵或圓如彈玲瓏有竅白而堅

云々

按もろに灌籍に載もる而の況多ハより理り又拘泥て
す偏どる所をりりと見ても支へたよゆめど詠よ
断端の水と禽と電とはかまつてゆゑとハ辨と
侍毛乞車児童とくじどももやくす要従うるとちん
あく雲采乃冷溶ノ原ノ原ノ原ノ原ノ原ノ原
電ハ金ノ池中の水とあくさりて騰蛇の趣を中ア
あく雲采乃のあく色を面のどくははははははは
姪の而隠あくとく葉ひりもどるノ原ノ原ノ原
山乃麓ノ傍の農家ノハ夏月電ノ姪の事と春采

早く知る田畠ノす心がまへともる事とぞ榛名山ノハ
御山洗う大成湖冰ノ其湖水ノ冬水ノ春
より中心より解らとくとハ電う岩より解らとく
電をとくとく切らとくとく中心より解初とバカリとく解
省より解初とくとく中心より幼毛俊冰解ノリ波
暮月くつぐもとけざると水とちへかの騰蛇のままで
姪ノまくとくとく日光山ノ湖冰も同様とみえうるとして
香一電ハ中彈きノ湖水ノ冰うんとくとくとくとく
盧後ノ河とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
謝在抗云電似是霰ノ大者但雨霰寒而雨電不寒
難晴而電易晴如驟雨然北方常遇之相傳龍過則電下四時皆
有余在齊魯四五月間屢見之不必冬也とくとくとくとくとく

と云ふ

和訓葉曰新接字鏡和石妙ト電トあり通教の後とすて
名づくからソリテ裏をもよりて電ハ吾邦ノ通字也
萬葉集に丸雪と義訓せり今ノ俗多ヒヨウトシテ
冰雨トシテアリテ一陸氏が説アリ電ハ冰雨也トス
駒山潮音雨電紀事云文政十三年歲次庚寅閏三月
念九午後晴天忽然晦冥迅雷兩三聲降電半時餘破瓦穿
屋株草多敗都下駒籠根津上野淺草之地尤甚矣其電小
者如梅子栗實大者如拳如胱毎塊有文如童辨梅花或似
牡丹花皆於中心有一堅實如水精白玉外邊絶類花辨東
轄山中所降大者共二三十錢或至五十錢駒籠西教寺裏
所降大者六錢二分或六錢橫量二寸三分或三寸皆有花文

電

三ノ五十六

乃是千歳之一奇事也曾門稗雅曰形全似玉珠其粒皆三
出此唯合小者形不同今所見大而有花文者乃錄見聞以
傳後世云



又勝田行乃大雨雹行乃待事と見まなり變不まにな
詔と是とも迎東安及ばざる降冰あり

大雨雹行

勝田獻

雷

三ノ五十七

庚寅閏月春盡日節入清和陽景驕向晚天氣忽變更寒威
刺々生迅颶雷公怒擊散硬雨明珠圓轉逆且跳湧吏怪雲
蔽四野林谷振動泣山魈太丸小丸破屋瓦千矢萬矢下九
霄鳥雀飛回無處避女兒錯愕互叫囂忽疑馮夷發憤怒手
握神槌碎瓊瑤更怪女媧補天處誤觸列宿墜斗杓別有花
紋震可愛三出五出巧於描君不聞昔時雨雹如人頭耳目
鼻口婉含嬌天工奇絕不可測甚勝人間費刻閒安知天公
好伎戲別發秘藏慰無聊人道此物非吉兆陰氣肅殺傷稼
苗誰知太平無事朝縱有災異忽冰消只今四海無一事此
物何足為氣妖雖然祥異天所戒只恐嘉穀不豐饒默禱皇
天后土合和氣五風十雨玉燭調

又天保七年丙午二月伯耆の國大山より一粟の黒雲起り



來りと但馬の國大原谷と云一谷一山間の狭きあうきども電す
たりかひのひに重き宇如余小うるは里を安宿よ人全
慢我もかうくまじも野鶴の牛と覗くりとの事一毫ハ
主時主地(行会店)何事よりゆくり然ども人うき傍れ
ナリ牛の覗くりとハ荷と同りは時の電ハ三
尺海賊する故多々の難計るが覗くるも多々りし
ミテ又伯耆の大山うちハ國牆一國と済くくその多く
其餘里も五ども重道也リハナリも電ハ角もどして
は前(來り)と断作ハリ降するハ一軒とてソリ